

【緑地を楽しむ本】

『原発事故で、生きものたちに何がおこったか。』

永幡嘉之 写真・文
岩崎書店



2011年3月11日、大津波とその後起こった原発事故は今でも私たちの心に深い傷を残しています。あの時、放射能に追われて避難した多くの人達は今もまだ不自由な生活を続けています。でも、人間は、避難できました。人々のまわりに暮らしていた生きもののほと

んどは、そのまま放置されたのです。ペットや家畜はそれでも、何とか助けようと懸命な努力もされましたが、自分の力で生きていた野生の生きもの、鳥や虫たちのことは全く助ける人も手段もありませんでした。彼らは一体どうなっただろう…気になっていたことに答えてくれる本が出ました。

事故は2つの面から、自然に影響を与えました。一つは、人間の営みが無くなったことです。里山は、ずっと昔から人が手を加え、生きものたちもそれに適応して生きてきたのです。人もいず、水も干上がった田んぼ、そこにいるべき水生昆虫やカエルは

住処を奪われました。もう一つは放射能の影響です。放射線によって壊された遺伝子の影響はすぐに現れるものではなく、何十年という長い観察が必要でしょう。でももうすでに目に見える異常がシジミチョウなどに出始めているとか。びっくりしました。もっと大きな生き物はどうなのだろう、気になるところです。

この本で最初に目にするのは、カバーの、イノシシが闊歩する道路やセイタカアワダチソウに覆われた田んぼの写真です。表紙を開くと、のどかな春の里山の風景。あれ、これは何の本だったのかしら？と一瞬混乱するほどです。でもこれは原発事故以前の、どこにでもあった風景なのです。それが、カバーを取り除いて表紙を見ると…一面の黒いビニール袋の山。ショックでした。あの美しかった里山が、表土をはがされてこんな黒い袋だらけになってしまっているなんて。本を手にとったら、ぜひカバーを外して表紙も見てください。福島の悲鳴が聞こえてくるようです。

(小川)